



バスケットはチームスポーツだから周りとのコミュニケーションが大切。それまでは言葉の暴力への対処法が分からなくて、言い返さずに黙っていましたが、バスケット部に入ったことで「これからは言われたことに返してみよう」と心に決めました。例えば「お前、黒いな」に対して「日焼けサロンで寝ちゃった〜」と返す。そうしたらチームメイトが「おもしろい奴!」と反応してくれて。

翌年、新しく赴任してきた先生が顧問になると、地区大会ベスト4のチームにまで成長しました。僕は中心選手に抜擢されて、県選抜にも選ばれるようになりました。

すると、かつてのいじめっ子たちが「お前すごいな」と見る目を変えて。ちゃんと話してみたら彼らも実はいい奴で、一緒につるんでいたら、いつの間にか学校中の人気者になっていました。

中学卒業後は就職するつもりで1年生の時から就職ガイダンスに行っていました。バスケの推薦で高校へ行きました。大学にも行きました。コーチの紹介で映画に出る機会があって、それが芸能界へ進むきっかけになりました。バスケが人生を導いてくれたのです。

“普通の日本人”として

芸能活動を始めても20代はまったく仕事がなかったです。95%がアルバイト、5%が芸能の仕事という感じでした。

少ない機会のなかで「これは!？」と思ったのが舞台でした。時代劇で熟練の役者さんたちが40分以上も引っ張った揚げ句、いざ登場した殿様が黒人という(笑)。そこでどっと笑いが起きて「もしかしたらギャップを仕事に生かせるのかな?」と気付かせてくれました。中学生時代にミックスルーツ、ブラックルーツをネタに変えてきたことと同じです。

ですが、僕のそういうスタンスを不快に感じる人がいることを知っています。「ルーツへの誇りがない」「知名度があるからネタにできる」などと言われることがあります。

僕の根っこは臆病です。だから、いじめから逃げました。最初は抵抗したし、言葉や暴力で戦う手段もありましたが、逃げることで生き抜きました。「戦っていかないと日本の差別はなくなる」。すごく分かります。ですが僕はビビりで小心者だから、それができませんでした。楽しく過ごす方法を考えるなかで見つけたのが“逃げる”こと。それが僕の戦い方でした。

モヤモヤする時は今でもありますよ。「なんで日本語できるの?」とか「黒人だから歌うまいよね?」とか言われて……。相手は話の入り口にしているつもりかもしれませんが、モヤッとして、いい返しができないこともあります。

それでも会話していくことが必要だと思います。ルーツに気を遣われすぎたらコミュニケーションが成り立ちません。だんだんと社会がアップデートされて、肌の色が違って“普通の日本人”同士として「好きな食べ物は?」「音楽はどんな趣味?」のように話ができるのが理想です。



匿名だから話せることがある

最近、10代のミックスルーツの子と話すと、若者が悩む事柄は30年前から変わっていないなと感じます。SNSの発達によって嫌な思いをする機会が増えている印象さえあります。10歳当時の僕がタイムスリップしてきたら、生きていけないと思うぐらい過酷ですよ。

だからと言ってインターネットを悪者にする気はありません。逆に、SOSを発信することもできるし、多様な意見を目にすることもできる。そうして知恵や引き出しを増やせる強みがあります。

インターネットが持つ匿名性について、世間では誹謗中傷や炎上といったネガティブなイメージが先行しています。ですが、いい面もあります。僕は、匿名だからこそ悩みを打ち明けられた経験があるのです。

小学4年生のいちばんいじめがひどかった頃、「いのちの電話」に相談したことがあります。かけようと思ってから実際にダイヤルするまでかなり迷いましたが、いざ話してみると自分の素性を伝えなくていい、相手の顔も名前も分からないことで、親や先生に言えない悩みを素直に吐き出せました。

匿名は悪いことばかりではありません。そして、インターネットは国境を超える。今、小さい社会で生きていて、つらいことばかりだったとしても、ネットを開いたら思いを共有できる誰かと繋がる可能性があります。自分が居心地のよい場所を見つけてほしいです。

“雑”なくらいがちょうどいい

講演活動のため学校へ行くと「ミックスルーツの子が増えたな」と感じます。ひとつの学校に十数人いることもありますね。僕が3年生まで過ごした小学校は1,000人規模でしたが、ミックスルーツは自分ひとりでした。現代の子どもたちにとって、僕のような存在は珍しくないのかもしれない。

逆に、僕より年齢が上の方には、ミックスルーツは「自分と違う人」と見られやすいのかもしれない。どう接すればいいか分からない、と。

真面目な話、ヒントは蒲田にあると思います。僕が幼い頃、祖母と商店街へ行くと肉屋さんが鶏肉をサービスしてくれたり、八百屋さんが大根1本を付け足してくれたり、かわいがってくれたのです。心の中では「お父さんがいなくてかわいそう」「ブラックルーツで大変そう」と思っていたのかもしれない。ですがむやみにプライベートに立ち入らず、ただ温かく接してくれた。人情味というか、雑な温かさというか(笑)。気を遣いすぎずにコミュニケーションを取るのは、現代社会にいちばん必要なものかもしれませんよね。

蒲田の人はフレンドリーで冗談が好き。そして雑に温かい。それらは学校教育や社会運動で身に付くものではなく、人々がずっと育んできた素晴らしい文化だと思います。ミックスルーツ、ブラックルーツに対しても同じように接してほしいです。ほんと、雑なくらいがちょうどいいのです。

